

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：33910

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520598

研究課題名(和文)コーパスを用いた名詞句の分布と認可方法に関する通時的・通言語的研究

研究課題名(英文) A Corpus-based Diachronic and Cross-linguistic Study of the Distribution and Licensing of Nouns

研究代表者

柳 朋宏 (YANAGI, Tomohiro)

中部大学・人文学部・准教授

研究者番号：70340205

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、様々な英語歴史コーパスから得られたデータに基づき、英語の歴史における名詞句の分布と認可について論じた。主題項受動文や受動虚辞構文における語順の多様性は格の階層性、情報構造、統語構造の違いに依存していると論じた。また、経験者構文の与格名詞は前置詞を伴うようになるが、二重目的語構文における与格名詞は前置詞を伴わない。このような変化の違いは格の違いに起因すると提案した。さらに、生成文法において様々な形で定式化されている格フィルター(名詞句は格を付与されなければならない)は名詞句の分布と認可だけでなく、英語における名詞句の通時的変化を説明する上で重要な役割を担っていると主張した。

研究成果の概要(英文)：On the basis of data retrieved from various kinds of English historical corpora, the present research discusses the distribution and licensing of noun phrases in the history of English. It is argued that word order variation in Theme passives and expletive passive constructions is dependent on case-hierarchy, information structure, and different syntactic configurations. It is also proposed that two different historical changes of dative-marked noun phrases can be attributed to the difference in type of dative assigned to noun phrases in Experiencer constructions and double object constructions. In addition, it is claimed that Case Filter--noun phrases must be case-marked--plays an important role in explaining diachronic changes of noun phrases as well as the synchronic distribution and licensing of noun phrases in English.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：格理論 英語史 内在格 語彙格 名詞句 生成文法

1. 研究開始当初の背景

生成文法ではその創成期から異口同音に「名詞句は格が付与されることで認可される」という「格フィルター」が仮定されており、「付与」の方法が理論的枠組みの変遷とともに改良が加えられている。しかしながら、通時的にみた場合、特に古英語や初期中英語では、必ずしも同じ認可方法によって全ての名詞句が認可されていたわけではない。そのため、理論的枠組みの変遷とは無関係に、初期中英語以前の名詞句に対してはいくつかの認可方法を仮定する必要があるという着想に至った。

二重目的語構文の間接目的語と形容詞の目的語に対して、古英語ではともに与格(形容詞の目的語は属格の場合もある)が付与されていた。一方、現代英語では、形容詞の目的語が前置詞を必要とするのに対し、二重目的語構文の間接目的語は依然として前置詞を必要としない。このような英語の通時的言語事実は、先行研究において提案されている格の3分法を用いることで適切に説明できることを示している。ここでいう格の3分法とは「構造格」と「内在格」、「語彙格」を区別するものである。これまで「内在格」と「語彙格」は厳密に区別されることはほとんどなかったが、この2つの非構造格を明確に区別することで上記の言語変化を適切に説明することが可能となる。

これまで行ってきた研究をさらに発展させ、二重目的語構文・形容詞構文だけでなく、与格動詞構文や非人称構文にもその調査対象を広げ、より一般的な認可方法の構築を目指すことに至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、英語史における名詞句の分布を最新の生成文法理論の枠組みを用いて分析し、各時代で利用可能な名詞句の認可方法を提案することである。また、構造格と内在格、語彙格を区別する形態的・統語的基準を提案するとともに、英語の歴史コーパスから得られた名詞句の分布に関するデータを、名詞句の格形態、名詞句が生起する節の種類、動詞・形容詞との位置関係等に基づいて分類し、データベース化した後、通時的にだけでなく、通言語的にも広く適用できる名詞句の認可方法の構築を目指す。

名詞句の分布と認可方法の歴史的变化についての研究を始めており、認可方法に関する全体の大きな枠組みはすでに提案されている。今後は調査対象となる構文を与格動詞構文や非人称構文等にも広げていき、本研究で提案する名詞句の認可方法がどの時代で利用可能であり、どの時代で利用可能でなくなったかを論じる。

また、「構造格」に加え、「内在格」や「語彙格」が提案されているが、「内在格」と「語彙格」の形態的・統語的に区別する具体的な

提案がなされていない。そこで本研究では、英語歴史コーパスの計量的な分析を通して、両者を区別する形態的・統語的基準を明らかにする。

英語の歴史を通して、「構造格」による名詞句の認可は途絶えることなく利用可能であるが、「内在格」と「語彙格」を持つ古英語の名詞句がその後、分布や認可方法をどのように変えていったかについて分析を行う。このような格の3分法による英語の通時的研究は国内外を通してまだなされておらず、その点で独創的であると言える。

歴史コーパスから得られた名詞句の分布に関するデータに対して計量的な分析と生成文法に基づく理論的分析を行う。これはコーパスに基づく計量的研究と生成文法による理論的研究の融合であり、本研究の特色の1つである。さらに、本研究で提案する名詞句の認可方法は、通言語的にも利用価値のあるのであり、言語の理論的研究だけでなく、コーパスと生成文法の両方に基づいた英語史研究に対しても大きな貢献が期待できる。

3. 研究の方法

英語史における名詞句の認可方法に関する研究を進め、構造格と内在格、語彙格を区別する形態的・統語的基準を提案するとともに、分析対象となる構文の範囲を広げる。歴史コーパスから得られたデータに基づき、本研究で提案する名詞句の認可方法の妥当性を計量的に示す。

分析対象となる名詞句の分布に関する用例は、英語歴史コーパスを利用して収集する。使用予定の英語歴史コーパスは以下の通りである。古英語では、散文コーパスである York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose と韻文コーパスである York-Helsinki Parsed Corpus of Old English Poetry の2種類を用いる。中英語以降のコーパスには Penn Helsinki Parsed Corpus シリーズを用いる。このシリーズには、中英語、初期近代英語、後期近代英語(イギリス英語)が揃っており、古英語のコーパスと合わせて、品詞情報と統語情報を利用した検索が可能である。こうした歴史コーパスではデータ量が少ない時代については書簡集コーパスである The Parsed Corpus of Early English Correspondence や中英語の散文コーパスである Innsbruck Prose Corpus of Middle English などを活用し、データ量の少なさを補う。

古英語や中英語では、格語尾が豊富であったため、従来のコーパスでは検索が複雑になり、あまり実用的ではなかったが、近年公開されている Penn Helsinki Parsed Corpus シリーズでは、品詞情報や統語情報を利用した検索が可能である。従来の検索ツールの使用方法・活用方法をまとめ、広く検索ツールが利用できるよう概説書を公開する。また、意

味的な相違を排除して、通時的・通言語的な統語分析を容易に行うため、各時代・各言語の聖書コーパスも利用する予定である。

古英語の散文・韻文コーパスから順次、データ収集と分析に取りかかる。名詞句を含む用例を収集した後、名詞句の格形態、生起している節の種類、述語（動詞・形容詞）との位置関係をもとに用例を分類し、データベース化していく。

具体的な研究方法としては、生成文法に基づいた分析を採用するが、名詞句の分布と認可方法の変化について、言語の内的要因だけでなく、ケルト語や古ノルド語といった他言語との言語接触のような外的要因についても視野を広げ、分析を進める予定である。以上のように分析を進めながら、生成文法に基づいた仮説の妥当性を検証する。

名詞句の分布に関する言語事実を、名詞句の格形態、生起している節の種類、述語（動詞・形容詞）との位置関係に基づき、整理・分類し、計量的な処理を続け、生成文法に基づいた分析を行う。また、他言語からの用例も文献やコーパス等から収集し、通言語的な側面からの考察を通して、英語の通時的分析から得られた名詞句の認可方法の普遍性についても考察を行う。

4. 研究成果

二重目的語構文の受動化に焦点をあて、古英語で観察された「主題項受動文」の分析を中心に行った。古英語の二重目的語構文における「与格着点項」(間接目的語)と「対格主題項」(直接目的語)との語順は、2つの目的語が共に名詞の場合、「与格着点項-対格主題項」語順と「対格主題項-与格着点項」語順とがほぼ同じ割合で用いられていたことが知られている。この2種類の語順に対して、受動化が適用された場合、主題項はその生起する位置に関係なく主格が付与されており、2つの項が名詞句である場合に、古英語コーパスから得られたデータに基づき、「主格主題項-与格着点項」語順の方が「与格着点項-主格主題項」語順よりも生起する割合が高いことを示した。

このことは名詞句の線形語順を決定する要因として格の階層性が関わっていることを示唆しているといえる。つまり与格と対格は同じ階層に属しており優先順位はないが、与格と主格については与格よりも主格が優先されている。また、項の統語範疇に関していえば、当該の主題項受動文では2つの項が名詞句である用例は少なく、どちらか一方の項が代名詞である用例が多く観察された。2つの項の一方が代名詞である場合、項の主題役（着点もしくは主題）や格形態（主格もしくは与格）に関係なく、代名詞の項が名詞句の項に先行する語順であることを統計的に示した。この言語事実は「旧情報である定表現が新情報である不定表現に先行する」とい

う一般的な傾向に一致するものであり、定表現である代名詞が不定表現である名詞句に先行する語順が優先されている。

さらに、2つの項が共に代名詞である用例が少数であったことから、受動文における主題項と着点項の線形語順の決定に情報構造が関係していることが伺える。また、与格着点項が主格主題項に先行し、話題要素が文頭に生起している例も観察された。このような語順に関する言語事実から、与格名詞句が典型的な主語位置に生起していると考えられることができる。生成文法ではどのような要素が典型的な主語位置に生起できるかが論争の1つとなっており「主格」要素がその候補として頻繁に挙げられているが、本研究を通して得られた成果から、必ずしも「主格」要素のみが典型的な主語位置に現れるわけではなく、少なくとも古英語では「与格」要素も同じ位置に生起しており、文法理論を構築する上でも興味深い現象である。

受動虚辞構文 (there を伴う受動文) は中英語において観察されており、その後近代英語、現代英語と使用されている。しかしながら、中英語・近代英語で用いられていた受動虚辞構文では意味上の主語は様々な統語位置に現れることが可能であった。本研究では中英語・近代英語のコーパスに基づいた調査の結果、意味上の主語が生起する位置を「法助動詞と be 動詞の間」「be 動詞と過去分詞の間」「過去分詞と副詞要素の間」「文末」という4つに分類した。

中英語ではこの4つの統語位置の中、「be 動詞と過去分詞の間」に生起する場合は、中英語期を通して最も多く観察された。これに対して、中英語から近代英語にかけて書かれた書簡集のコーパスを調査した結果、受動虚辞構文における意味上の主語は「過去分詞と副詞要素の間」に生起する場合は最も多く観察された。このような主語位置の違いについての詳細な分析は、更なる用例の収集が必要のため、今後の課題としたいが、時代の違いとジャンルの違いがその要因として考えられることを本研究を通して示唆した。

また「法助動詞と be 動詞の間」に意味上の主語が生起する場合、中英語のコーパスにおいても書簡集のコーパスにおいても、not などの否定要素もしくは all などの数量詞を伴う名詞句が意味上の主語として用いられていた。このように動詞要素の間に意味上の主語が生起する虚辞構文の存在は、統語的に2つの典型的な主語位置を仮定する論拠と考えられている。しかしながら、本研究では意味上の主語が否定要素や数量詞を含んでいる場合「法助動詞と be 動詞の間」に生起する可能性が高いことを考慮し、2つの典型的な主語位置を仮定する必要はなく、当該の受動虚辞構文における主語位置は、通常の否定名詞句や数量詞を含む名詞を含む構文と平行的に分析できると論じた。こうした分析

の帰結として、先行研究で仮定されている2つの機能範疇が投射する統語構造を破棄し、より簡潔な統語構造を仮定することができると主張した。

さらに受動虚辞構文においては法助動詞が含まれている事例が多いことから、通常受動文と比べて主語要素が生起可能な統語位置が1つ増えると提案した。この増加した法助動詞の投射が典型的な主語位置の1つとして利用できる可能性があることを示した。

非人称構文の1つである与格経験者構文と二重目的語構文で用いられていた与格名詞に焦点をあて、2種類の異なる格による認可方法を提案し、その妥当性を示した。古英語から中英語にかけての経験者構文では、経験者項は与格で表されていたが次第に前置詞を伴うようになる。これは一般的な英語の歴史における統語変化の傾向に一致する。一方同じ与格であっても二重目的語構文における間接目的語は、古英語から現代英語にかけて、動詞に隣接する場合には前置詞を伴うことはほとんどなかった。このような通時的な変化の違いを説明するため、古英語から中英語にかけての経験者構文における与格名詞には語彙要素である「動詞」から語彙格と格が付与されていたのに対し、二重目的語構文における与格の間接目的語には語彙的機能範疇としての「動詞要素」から内在格と格が付与されていたと提案した。

時代が進み、名詞における格語尾の区別が消失するのに連動し、非構造格である語彙格と内在格が消失すると、経験者項や間接目的語は非構造格では認可されなくなる。その結果、構造格によって認可されることになるが、それぞれの構文における統語構造と動詞の語彙特性の違いから、経験者項構文では前置詞が用いられるようになったのに対し、二重目的語構文では前置詞を用いる必要がなく、語彙的機能範疇である「動詞要素」の機能変化により構造格が付与されるようになったと論じた。

また中英語のコーパスを調査した結果、経験者構文では経験者項が動詞に先行する場合は代名詞がほとんどであった。これは代名詞が前置詞による格標示によって認可されるだけでなく、代名詞の動詞への編入によっても認可されていたからだと分析した。このような編入の結果、英語には代名詞と動詞が融合した語が形成されたと論じた。

理論的には、英語の名詞句に関する通時的研究を通して、生成文法理論において様々な形で定式化されている格フィルター「(音形を持つ)名詞句は格を付与されなければならない」が名詞句の分布と認可だけでなく、英語における名詞句の通時的変化を説明する上で重要な役割を担っていることを示した。

従来の英語史の理論的研究では「変化」のみにその論点が向けられていたが、本研究で

は「変化」だけでなく「無変化」にも着目し、どのような形態的・統語的条件によって言語は変化するのか、あるいは変化しないのかを論じた。今後は方言差も考慮しながら英語の歴史における大きな変化と地域変種における小さな変化を理論的に論じる予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4件)

柳朋宏. 「後期中英語における *semen* の統語特性について—Caxton からの用例を中心に—『15世紀の英語—文法からテキストへ—』谷明信・尾崎久男編, pp. 1-20, 大阪洋書, 大阪. 2013年3月. (査読無)

YANAGI, Tomohiro. Ditransitive Alternation and Theme Passivization in Old English. *Outposts of Historical Corpus Linguistics: From the Helsinki Corpus to a Proliferation of Resources*, ed. by Jukka Tyrkkö, et al., Research Unit for Variation, Contacts, and Change in English. 2012年10月. (査読有)

<http://www.helsinki.fi/varieng/series/volumes/10/yanagi/>

YANAGI, Tomohiro. Some Notes on the Distribution of the Quantifier *All* in Middle English. *Middle and Modern English Corpus Linguistics: A Multi-dimensional Approach*, ed. by Manfred Markus, et al., pp. 141-155, John Benjamins, Amsterdam. 2012年7月. (査読有)

YANAGI, Tomohiro. An Overview of the Distribution of Quantifiers in Old English. *Chubu International Review* 7, 157-166. 2012年4月. (査読無)

[学会発表](計 6件)

YANAGI, Tomohiro. On the Subject Status of Dative Nominals in *To*-infinitival Clauses in Earlier English. Subject: Cognitive, Typological and Functional Approaches, 2013年9月12日.

(University of Helsinki, Finland) (査読有)

柳朋宏. 英語の歴史における2種類の「与格」. 日本英文学会第85回大会シンポジウム「格と言語変化」2013年5月26日. (東北大学川内キャンパス) (査読無)

YANAGI, Tomohiro. From Dative-Marked Experiencers to Prepositional Experiencers in the History of English. 17th International Conference on English Historical Linguistics, 2012年8月25日. (University of Zurich,

Switzerland) (査読有)

YANAGI, Tomohiro. Argument Realization in Nominalization of Old English. 15th International Morphology Meeting, 2012年2月11日. (Wirtschaftsuniversität Wien, Austria) (査読有)

YANAGI, Tomohiro. (A)symmetries between Theme and Goal in Ditransitive Passive Constructions of OE. Helsinki Corpus Festival: The Past, Present, and Future of English Historical Corpora, 2011年9月30日. (Tieteiden talo, Helsinki, Finland) (査読有)

YANAGI, Tomohiro. On the Subject Position of Passive Expletive Constructions in Middle English. Middle and Modern English Corpus Linguistics Conference 2011, 2011年8月26日. (Nakanoshima Center, Osaka University). (査読有)

[図書](計 1件)

柳朋宏. 「英語史における動詞移動の変遷と屈折の豊かさについて」藤田耕司・松本マスミ・児玉一宏・谷口一美(編)『最新言語理論を英語教育に活用する』開拓社, 東京. 担当箇所: pp. 265-276. 2012年3月. (査読無)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

柳 朋宏 (YANAGI Tomohiro)
中部大学・人文学部・准教授
研究者番号: 70340205